

テクネ・マクラ「芸術は永し」

# ΤΕΧΝΗ ΜΑΚΡΑ

女子美術大学歴史資料室ニュースレター

第 1 号



女子美術大学60周年記念碑板の拓本。ギリシャ語で「人生は短く、芸術は永し」の句が刻まれている。この句は、毎年学生に配布される「女子美手帖」にも記され、親しまれている。歴史資料室ニュースレターを創刊するにあたり、この句の一文「ΤΕΧΝΗ ΜΑΚΡΑ」をその名称とした。

# 創刊のご挨拶

## 学校法人女子美術大学

## 理事長 大村 智

本年、女子美術大学は創立110周年を迎えました。これまで110年もの永きにわたり建学の精神を堅持し、一貫して美術をもって女性の自立を図ることを理念として歴史を重ねてきました。先人達の智恵や努力の積み重ねがあって、今日の女子

美が成り立っていることを創設の理念や歴史を学ぶことによって知ることができます。この軌跡の延長に我々が歩むべき道標があります。

この度、創立110周年記念事業の一つとして杉並キャンパスに歴史資料館を設置し、学生・生徒への自校

教育ばかりでなく、近隣地域の皆様に本学の教育・研究の成果、文化振興の貢献についてご覧いただきたく計画を進めております。今後も女子美術大学は、先人達の功績を顕彰すると共に建学の精神の具現を図る為たゆまぬ努力を続けてまいります。

## 女子美術大学・女子美術大学短期大学部

## 学長 佐野 めい

この度創刊されたニューズレターにより、本学の110年の歴史からのその時々活躍された方々の顔が見えることを期待しています。ようやく本学の歴史資料活用場が整備されてきたことは大変嬉しく思います。100周年の際、大村理事長の

ご発案により「歴史資料整備委員会」が発足いたしました。そして昨年より一つの部署として組織づけられました。

今年度から大学・短大のカリキュラムとして総合講座「基礎学習ゼミ」で自校史を取り入れることにな

りました。これを機に本学在学生在が先輩達の残した足跡を糧として、未来に繋げていっていただきたいと願っています。

## 女子美術大学付属高等学校・中学校

## 校長 継岡 リツ

女子美術大学付属高等学校・中学校は、大正4年(1915)女子美術学校の姉妹校として佐藤志津先生により創立されました。

志津先生の建学の思いは大学の姉妹校として学ぶ私たちに引き継がれ、今日までつづいています。そして

5年後に100周年をひかえた本年、新校舎に移り益々発展をしていくことでしょう。長い歴史の中には様々なことがありました。この度ニューズレター創刊は、大学と付属の歴史を生徒たちに知ってもらい良い機会だと思います。また、これ

までの歴史や活躍する卒業生を知り、彼女達が自分の将来に何か役に立つヒントを受取ってくれることを願っております。

# 創刊にあたり

原 聖

女子美には輝かしい歴史があります。文化勲章受章者に関係者が3人います。2年前に103歳で亡くなられた片岡球子さん。油絵の福沢一郎教授、それに皮革工芸家の大久保婦久子さんの3人です。中国革命の立役者、何香凝(かこうぎょう)女史は戦前の中国からの留学生ですし、れっきとした女子美卒の人物です。

こうしたことを今の学生たちは知りません。それが実情なのです。それでいいのでしょうか。そうではありません。女子美生は知っておくべきです。

輝かしい歴史を持つこと、それに誇りを持つことによって、学校に対する愛着も生まれます。そこに連帯感が生じ、絆も強くなります。それが大学としての女子美の力を強めることにもなります。

近年、大学のアイデンティティ、大学の校風、特徴が大いに問われるようになりました。それは大学間の競争がますます激しくなって、研究機関としての序列ではなく、むしろそれぞれの個性が重要視されはじめているからです。

そうしたなかで大学の歴史が問われているのです。自校史はいまやどの大学でも、重要であると位置づけられています。

女子美では、100周年の記念事業のなかで歴史整備委員会が設けられ、3年前に歴史資料整備委員会として活動が再開され、昨年、歴史資料室として独立した部局になりました。

歴史の長い大学は、長いからこそ、そのきちんとした整備が求められます。女子美の場合、困ったことに、1908年、1956年の2度に渡る大火に見舞われ、そのたびに移転を余儀なくされました。本郷弓町から菊坂町へ、さらには杉並和田本町への移動です。そのたびに数多くの貴重な史料が失われました。それを埋め合わせるための各種の補完的史料を発掘することが求められているのです。

歴史整備委員会が設けられる前から、戦前の卒業写真や卒業証書、授業風景の写真など、同窓会の皆さんから寄せられています。それを整理することも、歴史資料室の重要な役割です。

なによりも重要なのは、卒業した皆さんからの学生当時の証言を得ることです。歴史整備委員会では、これまでも戦前の卒業生を中心に、インタビューを行ってきました。その多くの方々はずすでにご高齢です。したがって、こうした作業は迅速に要領よく行い、できるだけ多くの証言を得ることが肝心です。

そのためには同窓生や退職された教職員の皆さんのご協力が不可欠になります。

このニューズレターは、こうした作業の進捗状況を逐一皆さんにご報告するための媒体です。インタビューできた方々に関する情報、また新たに届けられた資料、発掘できた史料、そうしたものを紙面で紹介していきます。

特に重視したいのは戦前の女子美についてです。当時は日本領だったことも大きいですが、韓国や大陸中国、台湾からの留学生もたくさんいました。そうしたことについては、残念ながら残っている史料がほとんどありません。同窓会をはじめ、いろいろな情報網を通じて、当時の学生たちがどんな人たちであったか、どういう授業を受けていたか、卒業後はどんな活動をしたか、明らかにしていきたいと思います。

同窓会の皆さん、退職された教職員の皆さん、また関係者をご存知の在校生、ご父母の皆さん、情報の提供にどうか協力をお願いします。

(本学教授／歴史資料整備委員会委員長)

# 歴史資料室のこれまでと今後

遠藤 九郎

大学院・大学・短期大学部・付属高等学校・中学校から成り立つ本学の歴史の調査・研究は、大村智理事長が第1期就任時(1997年)に2000年の創立100周年に向けて、本格的に始動しました。この時期の調査・研究の成果として、『女子美術大学百年史』の発行や、創立者の功績を再検討し、2000年5月に寄付行為の目的条項を見直し、改正したことなどに結実しました。

また1999年に就任した小松弘光学長が委員長となり、歴史整備委員会を発足し、創立に関する資料や創立者の一人である横井玉子の熊本での調査、戦前の東アジアからの留学生調査などに取り組み、2003年にはその成果の一つとして中国・台湾・韓国からの留学生を取り上げた展覧会「アジアの華」が開催されました。その後、2007年には同年に就任した佐野ぬい学長の下に歴史資料室が発足し、現在の歴史資料室には加藤成之元学長のご遺族や東洋美術史研究者で元芸術学部長を務められた松本栄一先生のご遺族から寄贈された書籍や資料の他、卒業生のご遺族や関係者からの教材・資料が寄贈され保存しております。特に、大正～昭和初期の卒業アルバムは、当時を知る貴重な資料です。

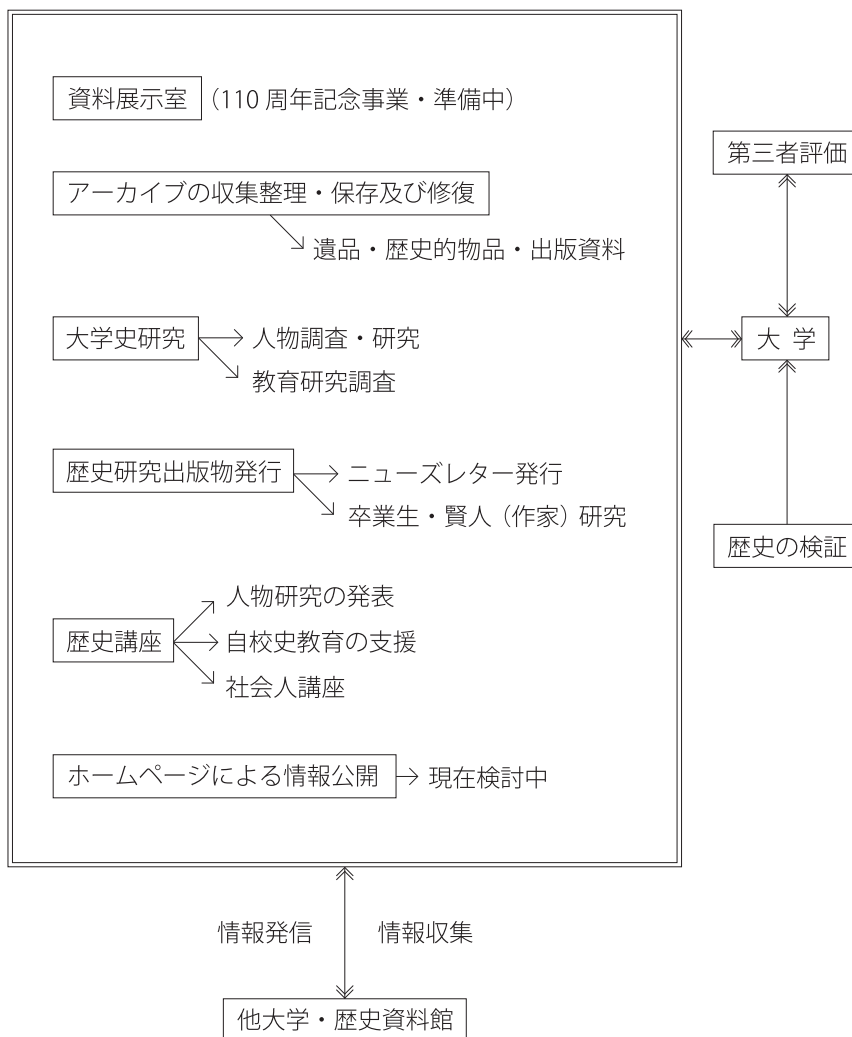
また、本学草創期から現在に至るまでの写真画像を保存しており、今後公開の可能性を考慮し、整理作業を進めています。

今後、110周年記念事業の一つである歴史資料館発足とアーカイ

ブズの準備に入り、本誌にて情報公開していきます。なお、本学の歴史に関する情報がありましたらご一報いただければ幸いに存じます。

(110周年記念事業調査役)

(表1) 歴史資料室の役割



## 女子美生のはなし

# 足助 恒

西洋画科第1期卒業生・本学教員

吉田 麻里



本学は、創立から現在までの長い歴史の中で多くの卒業生を世に送り出してきました。その諸先輩方の功績を称え、「女子美生のはなし」と題し簡単ではございますが、明治・大正期に卒業なさった方を卒業年次順に追ってご紹介してゆきます。

第1回目は、西洋画科第1期卒業生であり、本学の教員として多大な功績を残された足助恒先生をご紹介いたします。足助先生については、近年「近代日本の女性美術家」として注目が徐々に高まっているようです。

足助恒先生は、明治12年(1879)に岡山の酒造家の長女として生まれました。神戸女学院で少女時代を過ごし、開校間もない女子美術学校の西洋画科本科へ明治34年(1901)入学、2年後に西洋画科卒業第1期生として卒業しています。

西洋画科への入学理由や入学当時のことを足助先生本人が同窓会報に次のように述べています。

「私が洋画に入ったのは、始め私は日本画に入るつもりで女子美術へ見學にゆきましたところ生徒が石膏や、静物を描いてゐるのを見て興味が湧き願書を書き直して洋画に入學しました。さあ入つてから寫生々々といはれても、どう寫生すればいいのか全くわかりませんでした。(略)」(創立50

周年記念号)

「入学当時洋画部の学生は十五名程で、その次は本郷の弓町に学校がございました。当時は今と違い女の子が油絵の勉強を仕様と云ふと両親は勿論、親類縁者総出で反対し、女がペンキ屋になるのか、ときつく叱責されたものでした。しかし私の絵に対する情熱は止みがたく父を説き伏せて入学致しました。」(創立60周年記念号)

当時、女子教育というと家庭人としての教養が求められていたようで、本学に入ることは大変な苦勞があったように感じられます。そして油絵に魅了された足助先生は、卒業後情熱が冷めぬまま新たに洋画家の和田英作氏(東京美術学校教授)に付いて勉強するのです。

大正5年(1916)に西洋画科教員として本学の教壇に立ちます。この年本学では、教職員間での意見の相違から大半の教員が退職してゆき、新しい先生が次々に入ってきました。丁度、足助先生もその一人でした。そして、油絵の教員として約40年を母校の発展と教育に捧げ、多くの後輩たちを世に送り出す手助けをしてゆきました。その様子は先生自身が語った言葉や、教え子たちの思い出として同窓会報に多く残されています。

数回の校舎火災・移転、そして日本

画・西洋画両科の廃止問題や文部省の絵画教員無試験検定取得など、多くの出来事を体験し奮闘していた先生、そこには心から生徒を思い懸命に美術教育に取り組む姿が綴られていました。後年、寄宿舎の一室にて校友会に茶道や謡曲を教えるなど、退職してもなお教育者として過ごされていたようでしたが、「白内障」を患い失明に近い状態になり、甥の住む大阪へ引越しを余儀なくされるのでした。

昭和37年(1962)に永眠、多くの教え子たちに見送られたようです。

足助先生は画家として名声を得たわけではありませんが、芸術に携わる女子美術教育者として賞賛するに値する人物でした。

足助先生は自身のことを回想で「まこと私は芸術の道に進んだことを心から喜びとしております。」(創立50周年記念号)と述べているのです。

### 参考文献

女子美術専門学校同窓会『會報』8号(1929)、女子美術大学同窓会『女子美術同窓会』創立50周年記念号(1950)、3号(1952)、6号(1955)、10号(1959)、創立60周年記念号(1960)、13号(1962)、18号(1967)、21号(1971) 吉良智子「近代日本における女性と美術の社会的考察 - 洋画家足助恒を中心に」池田忍編『近代日本の女性美術家と女性像に関する研究』千葉大学大学院社会文化科学研究科 2006

(歴史資料室)

女子美・コレクション

## 横井玉子デザイン女子改良服

山田 直子

2009年5月13日から6月14日、女子美アートミュージアムにおいて女子美術大学同窓会主催の「やっぱり... ファッション造形。アートからデザインまで」展が開催されました。この展覧会は本学の服飾教育の歴史を伝える貴重な服飾品などとともに、近年の本学芸術学部ファッション造形学科卒業生の作品が展示されました。また、この展覧会には、歴史資料室所蔵の「女子改良服」(復元)が展示されました。これは、本学の創立者の一人である横井玉子によって考案された女子の制服で、明治34(1901)、『婦人新報』誌上で発表されたものです(図1)。会場には、『婦人新報』掲載の型紙をもとに、本学の小倉文子教授らによって復元・製作された複製が展示されました(図2)。

横井玉子デザインの「女子改良服」は着物のような襟の合わせ方ですが、肩にはギャザーが施され、ブラウスのようでもあります。下は袴のようですが、バックルがついています。なぜこのような和洋折衷の改良服がつけられたのでしょうか。日本人の生活スタイルが大きく変化した明治時代にその背景をみることができます。

明治維新以降、さまざまな分野で西洋式が導入されるなか、服装についても同様に洋装化が進みました。

明治初期、軍服、警察署警部、巡査、鉄道従業員、裁判所などの制服が洋装に改められ、まずは男性の制服の洋装化が進みます。女性の洋装の普及については鹿鳴館(1883-1894)の時代に端緒が開かれました。そこに集う皇族や華族は中礼服のローブ・デコルテ(イブニングドレス)を身に付けました。西洋の女性服は立礼に適していて、動作、歩行がしやすいという考えが広がり、一般の女性の服装においても洋装化されるようになります。しかし、明治20年代、急激な欧化政策に対して批判的な意見が高まり、国粹主義傾向が強まります。洋装は西洋の模倣であるという声がおこり、人々は再び和服を身に付けるようになります。明治26年(1893)、女子高等師範学校(現お茶の水女子大学)は制服に和装を採用。同じ頃、制服に洋装を採用していた宮城師範学校女子部は廃止を決定します。

その後、明治30年代にかけて教育者や研究者の間で女子の制服の改良について活発に議論が交わされます。当時、東京府第一高等女学校の教員であった三輪田眞佐子(1843-1927)は、「衣服の改良は今日の大問題である。今の女子の衣服は粗野であるため、これは改良して善良なる衣服とし、全国に用いるようにしなければ

ならない」とし、女子の制服の改良が急務であると訴えました。そのような状況のなか、横井は本学の学生に試着させるなどして研究を重ね、洋装・和装両者の利点を生かした「女子改良服」を考案しました。そのデザインは美しくかつ機能的で、活動的に生きる女子美術学校の学生たちにふさわしいものでした。



図1 『婦人新報』第50号挿絵

### 参考文献

横井たま子「女子改良服」『婦人新報』(第50号、1901、17-19頁) / 小倉文子、小林里江、小山田紀子「女子美術学校制服と明治の改良服」『女子美術大学研究紀要』(第31号、2001、77-89頁) / 小倉文子「制服復元プロジェクト」『女子美術大学広報誌 女子美』(第141号、2001、7頁)

(歴史資料室)



図2 展示風景

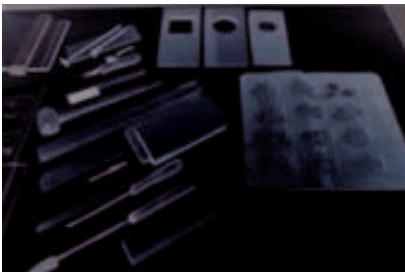
## 2009年度 歴史資料室日誌

### 5月

- 女子美術大学同窓会主催「やっぱり...ファッション造形。アートからデザインまで」展(女子美アートミュージアム)に「女子改良服(復元)」等を出品。



- 女子美アートミュージアムロビーに歴史資料展示コーナーを設置、刺繍教育をテーマにした展示。



### 6月

- 「美齡世代 横井玉子特集」(『熊

日新聞』2009年6月11日付)に取材協力、写真提供。

- 「洋風写実彫刻の先駆ー藤田文蔵」『鳥取市人物誌きらめく120人』(鳥取市、2010)に取材協力。
- 女子美術大学工芸科草創期についてインタビュー  
柚木沙弥郎名誉教授  
寺村祐子名誉教授  
清水明子教授  
高橋伴子氏(インタビュー)

### 7月

- 女子美術大学工芸科草創期についてインタビュー  
多々良玲子氏  
佐野豊子氏  
清水明子教授  
大澤樹子教授  
高橋伴子氏(インタビュー)

### 8月

- 「くまもとの偉人 女子美術大学の創設者 横井玉子」(『Hand to Land』、2009)に取材協力、写真提供。

### 10月

- 女子美術大学付属同窓会募金活動としての切手制作に写真提供。
- 熊本市役所他開催「横井小楠生誕200年記念祭パネル展」に取材協力、写真提供。
- 戦中の本科裁縫部についてインタビュー  
杉井あつみ名誉教授  
中村久子氏  
和泉志津枝氏

### 2010年1月

- 全国大学史料協議会主催「日本の大学ーその設立と社会」(明治大学博物館開催)に「女子美術大学校名板」、服飾品を出品。



## 2009年度 ご寄贈作品・資料一覧

2009年度に資料をご寄贈いただいた方や収集にご協力いただいた方の資料内容をここに記し、感謝の意を表します。

- 下田玲子氏 <中川嘉子氏卒業証書、校舎絵葉書、他6点>
- 山内郁子氏 (協力:高橋英子名誉教授) <池田年子氏旧蔵の写真1点>
- 青木純子氏 <『惹弗託氏教育学』他資料多数>
- 今村優子氏 (協力:杉井あつみ名誉教授) <山本きく著『和独裁縫画』第1~4巻、『図案構成理論』第1巻>
- 多々良玲子氏 <楽譜「女子美大学数え歌」他>
- 青山きみ氏 (協力:佐野ぬい学長) <女子美術学校裁縫教授要項・教授法資料>
- 山下喜子氏 (協力:岡田宜世教授) <高等科スケッチブック他>
- 齊藤朝子氏 <卒業生資料、『我等』他>

## 委員、スタッフ紹介

### □歴史資料整備委員会委員

委員長 原 聖（学部教員）  
広瀬 きよみ（学部教員）  
小林 信恵（短大教員）  
遠藤 九郎（事務職員）  
内藤 幸江（事務職員）  
谷口 秀子（外部委嘱委員）  
工藤 恒子（外部委嘱委員）  
見城 美子（外部委嘱委員）

### □歴史資料室スタッフ

室長 内藤 幸江  
澤井 智実  
山田 直子  
吉田 麻里  
安 美子

110周年記念事業 調査役  
遠藤 九郎

### 創刊号の編集をおえて

歴史資料室室長 内藤 幸江

歴史資料整備委員会の再開と歴史資料室が始働したことにより、資料の整理と調査が少しずつ進行しています。学生・教職員をはじめ多くの方々に歴史資料を使用して本学の研究をしていただくことを目標に今後収集活動や研究の一部を誌面で紹介していきたいと思えます。

### 情報提供・寄贈のお願い

本学は2010年で110周年を迎えますが、相次ぐ火災などにより、資料がわずかしかなかったり、特に1960年代以前の資料について重点的に現在、収集・調査を行っております。資料の収集につきまして皆様方のご協力をいただければ幸いです。1960年代以前の教材、教員との写真などをお持ちで、ご寄贈いただける方がいらっしゃいましたら、女子美術大学歴史資料室までご連絡くださいますようお願い申し上げます。

## 表紙写真

女子美術大学60周年記念碑板 拓本  
「人生は短く、芸術は永し」

ギリシャ・アカデミー元院長スピロス・メラス氏筆の句を刻んだ碑板。創立60周年を記念して、故乗松 巖名誉教授がギリシャから持ち帰り、杉並校舎内に設置した。



# TEXNH MAKPA 第1号

テクネ・マクラ「芸術は永し」

女子美術大学歴史資料室ニューズレター  
発行日：2010年6月1日  
編集・発行：女子美術大学歴史資料室  
デザイン：竹田奈那子

〒252-8538 神奈川県相模原市南区麻溝台1900 女子美術大学3号館4階  
TEL：042-778-6754 FAX：042-778-6675  
E-mail：heritage@venus.joshi.ac.jp



 女子美術大学